

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	李 静 宜
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">中国人日本語学習者の聴解における音声知覚と意味解析 －聴解時のチャンクの形成と結合に着目して－</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査            教 授            松 見   法 男 審査委員        教 授            永 田   良 太 審査委員        教 授            宮 谷   真 人</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、中国人日本語学習者を対象とし、認知心理学の手法を用いて、聴解時の情報処理を実験的に検討したものである。具体的には、Anderson（1985）による聴解の3段階モデル（以下、3段階モデル）に沿って、日本語学習者の聴解時の音声知覚と意味解析の様相を、チャンク（chunk）の形成と結合の観点から検討することを目的とした。実験では、知覚段階の情報処理を特徴づけるチャンクの形成と、解析段階の情報処理を特徴づけるチャンクの結合が実現される諸条件を明らかにすることによって、日本語学習者の聴解のメカニズムについて検討した。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、第二言語習得と日本語教育の分野における聴解に関する先行研究を概観し、本研究の主な説明理論となる3段階モデルについて説明した。そして、日本語学習者の聴解研究における未解明な点を指摘し、本研究の研究課題を提示した。</p> <p>第2章と第3章では、研究課題に沿って5つの実験を行い、日本語学習者の聴解における音声知覚と意味解析の特徴を調べた。</p> <p>実験1では、知覚段階に焦点を当て、聴解材料文の発話速度とポーズの頻度を操作し、チャンクがどのような単位で成立するのか、また、発話速度がチャンクの形成にどのような影響を及ぼすのかを探索的に検討した。上級学習者は句単位でチャンクを形成し、チャンクの形成は発話速度の大きさに依存する可能性が高いことが示唆された。</p> <p>実験2では、実験1の結果をふまえ、習熟度の観点を取り入れた上で、チャンクの形成における発話速度の役割をより詳細に検討した。実験2-aと実験2-bでは、それぞれ上級、中級の日本語学習者を対象とし、クリック音検出課題と意味一致性判断課題を用いて、チャンクの形成が発話速度の大きさに依存するか否か、また習熟度が上がるにつれてチャンクの単位がどのように変容するのか、について検討した。上級学習者では、句単位のチャンクの形成が認められ、それが発話速度の大きさに依存することがわかった。一方、中級学習者では、句単位でチャンクを形成する現象が見られず、チャンクの形成における発話速度の影響も認められなかった。</p> <p>実験3では、聴解における解析段階に焦点を当て、チャンクの結合過程としての意味解</p>			

析がどのように行われるのかについて検討した。実験 3-a と実験 3-b では、それぞれポーズなし条件とポーズあり条件を設定し、聴覚呈示による文容認可能性判断課題を用いて、チャンクの結合における統語的情報と意味的情報の役割を調べた。日本語学習者は意味解析を行う際、意味的情報を中心とし、統語的情報を補助手段として利用することが示唆された。

第 4 章では、実験 1 から実験 3 までの結果をまとめ、聴解時のチャンクの形成と結合の観点から、中国人日本語学習者の日本語の聴解における音声知覚と意味解析の特徴を総合的に記述し、考察した。そして、本研究の学術的意義、日本語教育への応用、及び今後の課題を述べた。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 先行研究で扱われていない日本語学習者における聴解時の情報処理の特徴について、3 段階モデルに沿って複数の実験を体系的に行い、知覚段階と解析段階における情報処理の様相を検討した点である。第二言語習得と日本語教育の分野では、聴解力が低い学習者の聴解成績をどのように向上させるかに焦点が当てられ、聴解成績の個人差が即時的な情報処理の過程にどのように現れるかは取り上げられてこなかった。本研究により、聴解時の情報処理過程の一端を解明することができ、学習者の個人差に応じた効果的な指導法の開発に繋がる教育的示唆が得られた。
2. チャンクの形成という知覚過程が、記憶のメカニズムとして聴解時にどのように機能するかを検討した点である。具体的には、チャンクの形成が発話速度の大きさに依存することを明らかにし、それが聴解力の発達にどのような意味をもつかについて議論した。本研究の結果から、句単位でチャンクを形成できるのは上級学習者であり、中級学習者ではそれを支持する証拠が得られなかった。句単位でのチャンクの形成は、日本語の音韻表象の発達、及び音韻処理の自動化を象徴するものであることが示された。
3. 情報処理過程を探究する研究方法を新たに採用した点である。従来、聴解に関する研究では、聴解後の再生テストや再認テストの得点が主な従属変数として用いられてきた。それは意味表象の形成状態を調べる手段として有効ではあるが、即時的な情報処理の過程を反映するものではない。本研究では、聴解後の再生・再認テストの他に、聴解時の音声知覚を調べるクリック音検出課題、及び即時的な意味解析を調べる文容認可能性判断課題を用いた。聴解における即時的な情報処理を扱う実験研究の方法上の発展性を示すことができた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 15 日